

令和元年を出発点に、取組をさらに充実させます！

セカンドステージ 9つの目標と18の指標

※指標は、姫路市教職員児童生徒意識調査(アンケート調査)の質問項目で設定し、児童生徒と教職員の肯定的回答の割合で成果を測ります。(各指標の数値は令和元年度のもの)

【進級・進学の段差の軽減】

目標1 誰もが通いたくなる学校を目指します。

- ・指標1 学校が楽しいと答える児童生徒の割合 (小90.0% 中88.0%)
- ・指標2 進級・進学することが楽しみだと答える児童生徒の割合 (小82.0% 中74.3%)

ブロックにおける小中一貫教育の視点

進級・進学に係る不要な段差は、学校生活への不応(学意欲の低下、いじめ、不登校、問題行動等)を引き起こす要因となります。不要な段差の軽減や解消に向けて、子供の発達段階に応じた意識的な指導、及び、交流活動の在り方を各中学校ブロックの推進委員会で検討します。そして、子供の心身の発育、学習の連続性を重視した小中一貫教育の取組を進めていきます。

【学力の向上】

目標2 子供たちの学びに向かう力を高めます。

- ・指標1 授業で、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたと答える児童生徒の割合 (小79.3% 中75.4%)
- ・指標2 家で、自分で計画を立てて勉強していると答える児童生徒の割合 (小67.2% 中53.6%)

目標3 子供たちに生きて働く知識・技能を習得させます。

- ・指標1 授業で学習したことを普通の生活の中で活用できないか考えることができると答える児童生徒の割合 (小79.0% 中66.9%)
- ・指標2 授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うと答える児童生徒の割合 (小91.9% 中76.6%)

目標4 子供たちの思考力・判断力・表現力を育成します。

- ・指標1 授業で、自分で調べたことを整理したり、まとめたりしていると答える児童生徒の割合 (小80.8% 中66.3%)
- ・指標2 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思うと答える児童生徒の割合 (小65.8% 中50.8%)

ブロックにおける小中一貫教育の視点

小中教職員の専門性を生かして、共に授業研究を行ったり、合同研修を実施したりすることで、学習の適時性や連続性を的確に把握し、子供の発達段階を重視した一貫性・連続性のある教育活動を展開します。「わかる授業」作りに向けた授業改善を、小中の教職員の協働によって図り、また、家庭学習の在り方についても、家庭との共有・連携を進めることで、子供たちの学びたい、学び続けたいという意欲を育てていきます。

※上記指標の他、全国学力・学習状況調査における正答率も参考指標とします。

【人間関係力の育成】

目標5 子供たちの自尊感情を醸成します。

- ・指標1 自分には良いところがあると思うと答える児童生徒の割合 (小77.0% 中71.6%)
- ・指標2 先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思うと答える児童生徒の割合 (小78.0% 中75.8%)

目標6 子供たちの他者と協働する力を高めます。

- ・指標1 学級やみんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがあると答える児童生徒の割合 (小90.3% 中89.7%)
- ・指標2 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うと答える児童生徒の割合 (小76.3% 中77.4%)

目標7 子供たちの社会参画力を醸成します。

- ・指標1 人の役に立つ人間になりたいと思うと答える児童生徒の割合 (小94.7% 中92.9%)
- ・指標2 地域や社会を良くするために何をすべきか考えることができると答える児童生徒の割合 (小75.0% 中62.9%)

ブロックにおける小中一貫教育の視点

小学生にとっての中学生は、将来のモデル像となります。中学生にとっての小学生は、自分を振り返る対象となるとともに、現在の自分自身を見つめる鏡にもなります。小学生と中学生の交流は回数を重ねるごとに深まります。一方で、学校間の距離、時間の確保等、ブロック特有の運営上の課題もあります。学校が離れていても、文書による子供間の交流、写真・映像による交流、作品展を通じての交流、一貫教育だよりなどの掲示物等、小中間、また同一ブロック内の小学校間でお互いの姿が意識できるような取組を工夫しながら進めていきます。

【教職員の意識改革・地域連携】

目標8 教職員の意識変革・授業改善を図ります。

- ・指標1 授業力向上に向けて、小中一貫教育の視点を持ち、つながりのある指導を重視した授業改善が図れていると答える教職員の割合 (小72.1% 中66.8%)
- ・指標2 学年や校種の枠を超えて連携を図ろうとしていると答える教職員の割合 (小85.1% 中82.0%)

目標9 社会に開かれたカリキュラムマネジメントを実現します。

- ・指標1 授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思う児童生徒の割合 (小86.0% 中68.0%)
- ・指標2 ブロック(学校)で、目指す子供像を保護者や地域住民と共有していると思うと答える教職員の割合 (小67.0% 中62.8%)

ブロックにおける小中一貫教育の視点

小学校と中学校の教職員は、互いの学校文化や風土等を踏まえた上で、9年間を見通した指導にあたることを意識し、お互いの専門性を融合させる協働研究体制を構築するなどの取組によって、授業改善を図り、指導力、授業力の向上を目指します。

また、子供たちは、地域のひと、もの、ことから様々なことを学びます。特に義務教育期間は、校区を単位とした、子供たちと地域社会との結びつきを強く仕組める時期でもあります。保護者や地域の人たちの協力を得ながら、地域に根ざした特色ある教育活動を推進することが大切です。

そのために、「学力の向上」と「人間関係力の育成」に向けてねらいを明確にし、計画的・組織的・継続的な取組を保護者や地域に積極的に発信し、保護者・地域住民と協働する体制をつくります。